右乳房の再建手術の様子。大胸筋の下に専用のパックを入れ、生理食塩水を少しづつ注入。乳房に"ふくらみ"を作っていく。

医療ジャーナリスト
伊藤隼也が行く！
ニッポンの医療現場 第11回

乳がん経験者の切実な訴え

まだまだ足りない がん経験者に対する理解

日本人女性の約20人に1人がかかるといわれる乳がん。30代、40代での発症も多く、仕事や育児をしながら治療を続ける女性も少なくない。生活と治療の狭間で、彼女たちは何を想い、望んでいるのか。その切実なる声を聞いた。

理解不足に傷つく患者 「すぐ死ぬ人」扱いも

現在、日本人女性がかかるがんのなかで、もっとも罹患率が高い乳がん。検診の普及で、早期発見・早期治療が可能となったとはいえ、医師から「がんです」と告知されたショックは計り知れない。

ここに追い打ちをかけるのが、周囲の乳がんへの理解不足による、不用意な言葉だ。

都内在住のAさんは、乳がんになったことを会社の上司に伝えたところ、気遣いの言葉はおろか、「このクソ忙しいときに、（病気になって）腹が立つ」と言われたという。Aさんの上司にとって、乳がんという病気は身近なものではなく、大事な即戦力がいなくなることで、とっさにこんな言葉が出てしまったのだろう。だが、乳がんについて少しでも理解があったら、こんな言葉は出なかったと思う。

東京目黒区にある東京共済病院のがん相談支援センターで、医療ソーシャルワーカーとして働く大沢かおりさんは、「こうした言葉が出る背景に、社会の乳がんに対する認識不足がある」と話す。

いとうしゅんや●医療ジャーナリスト・写真家　国内外問わずさまざまな医療現場を精力的に取材し、患者中心の医療実現のため活動中。テレビ・雑誌・書籍など、多数のメディアでより良い医療のあり方を追求・発信し続けている。http://shunya-ito.tv/

実は、大沢さん自身も乳がん経験者。月に2度「乳がん患者サロン」を開催し、同じ病気に向かい合う女性たちに情報交換する場を提供しているが、こうした話が話題に上がることもあるそうだ。

「乳がんについて、間違った知識をもっている方もいるようです。皆さん口を揃えておっしゃるのは、『乳がん＝死』ではないのに、そう思っている人たちが本当に多いということです。テレビ番組などの影響もあるのでしょうが、『すぐに死んでしまう人』と、腫れものに触るような扱いをされるのは、やりきれないと話されます」（同）

実際、妻が乳がんだと分かった夫が精神的にショックを受け、食事がのどを通らなくなり、妻に励まされたという話も聞く。これではどちらが「患者」なのか分からない。

乳がんの進行度はステージⅠからⅣまで分かれているが、「がん拠点病院の治療成績（04年）」をみると、初期のがんであるⅠ期の5年生存率は92・9％、Ⅱ期でも87・3％と高い。なかには悪性度の高いがんもあるが、多くは治療後も普通に過ごせる。まさに、この真実を知らないのだ。

こんな状況だからこそ、乳がん患者はお互いを支え合うようにネットなどで活発に情報交換を行っているのだろう。

抗がん剤の副作用 高額な薬代が負担に

乳がんの治療の主体は手術だ。再発予防を目的に、手術後に放射線を照射したり、抗がん剤やホルモン剤を投与したりする「術後補助療法」が多くのケースで実施される。

他のがんと同様、乳がんで使われる抗がん剤でも、脱毛や吐き気、食欲不振、味覚障害など、さまざまな副作用が生じる。最近は吐き気止めの薬も使われるようになり、副作用が軽減されつつあるが、それでも強い倦怠感や疲労感を治す薬はなく、そのつらさは実際に経験した人にしか分からない。また脱毛も抗がん剤治療が終わればもとに戻るが、予防することは現代の医学では不可能だ。

「いまはよい医療用カツラが出ていますが、100％人工のカツラの場合などは見る人によっては分かってしまう。そのような場合でも、女性がカツラを付けなければならないという事情を察して、気遣ってほしいものですね」

と大沢さんは語る。

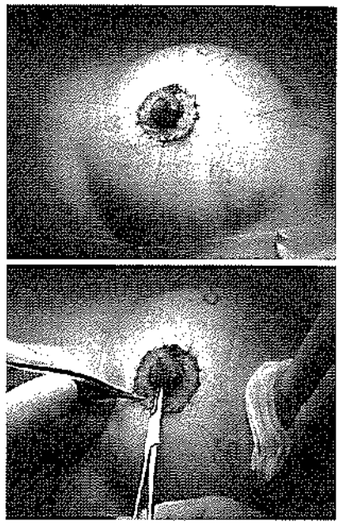
乳房再建を望む 理由は実はさまざま

乳がんの手術には、大きく分けて、がんのある乳房を部分的に切除する「乳房温存術」と、乳房と周囲のリンパ節を切除する「乳房全摘術」とがある。乳房全摘術を受けた後で、乳房を新しく作ることを「乳房再建」という。アメリカで始まり、日本でも乳房の喪失による苦痛を取り除く医療として、10年ほど前から普及していった。手術直後に再建する一次再建は「胸を失った」という喪失感を覚えなくてすむが、再発リスクが高いケースでは治療が終了してから行う二次再建になる。

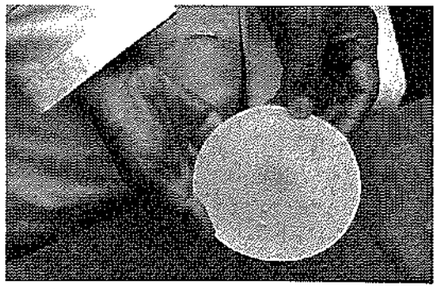
最近ではバストトップを本物そっくりに作る技術や、バストトップだけ自分のものを温存して乳房再建をする技術も登場したが、年齢とともに左右差が出てくることもあり、「完全な乳房」は、今後の課題だ。乳房再建を望むのは女性なら自然なことだが、育児中の女性では、「子どものため」という切実な問題も背景にある。「片方しかない乳房を見た子どもがショックを受けないように」と気遣い、再建をするのである。

また、乳房を取り戻したい思いには年齢は関係ない。74歳で乳房再建したBさんは、「胸が戻ったら性格が明るくなり、周囲から『彼氏でもできたの？』と言われた」と喜ぶ。70代のCさんは、医師から治療方針を示された際、再建の説明がなかったことから、「若い女性には再建の話をしているのに、どうして私にはしないの？」と医師に言い寄った。実は、こんな現実が乳がん治療の専門家の間でも看過されてきたのだ。

ピンクリボン運動などで、乳がん検診の重要性はかなり認識されたが、がんにかかった患者へのサポート体制は極めて貧弱だ。国はこれらの問題により積極的に取り組むべきだ。今回は乳がんを取り上げたが、他のがんでも同様で、"がん"が既に特殊な病気ではないという現実を、多くの国民は知るべきだろう。



乳房再建の名医、矢永博子医師（矢永クリニック）による乳房再建の様子。乳輪部分は、足の付け根の皮膚を移植することで代用する。



乳房の代わりとなるシリコン。本物の乳房のような弾力性と柔らかさを兼ね備えている。

転載・引用禁止

写真／SHUNYA ITO© 取材協力／山内リカ 協力／東京共済病院 矢永クリニック